

白ネギの産地拡大への取り組み支援

鳥取農業改良普及所

1. 取組の背景

鳥取県東部の白ネギは、25年程前に沿岸部の砂丘地に導入され、徐々に水田転作品目として中山間地域においても栽培が行われ、平成11年には生産者320戸が62haを栽培するまでとなった。しかしながら、生産農家の高齢化、労力不足等により、また輸入増による価格低迷等も拍車をかけ、生産量は縮小に転じ、平成17年には全盛期の4割程度の面積まで減少した。そこで、平成21年には県チャレンジプラン支援事業を活用して作業機械の支援、水田転作品目・冬場の収入源として位置づけるなど重点的に取り組まれ、徐々に回復してきている。また、更に白ネギ栽培を推進してラッキョウに並ぶもう一つの品目として育てようと気運が高まっている。

そこで、普及所は長期出荷に向けた作型の拡大への取り組みや、調製作業の省力化、新規栽培者への技術習得支援等、産地拡大を目指して支援を行った。

2. 活動内容

(1) 支援活動の体制

平成22年度から八頭・鳥取農業改良普及所とJA鳥取いなばの関係者でプロジェクトチームを組み、白ネギ、アスパラガス、甘長トウガラシなどの広域品目について、具体的な振興方策等を検討し共通認識を持った。また、平成23年度には農業試験場の研究員をメンバーに加えて試験研究との連携を強化した。更に平成25年度にはJA鳥取いなばが中心となり東部農林事務所等の関係者で新たな白ネギの振興方策を検討するため、プロジェクトチームを組織した。チームでは具体的な振興方策を検討し、関係者が同じ方向性を持って活動を行った。

(2) 農家意向調査の実施

まず、農家がどのような意向を持っているのか、どのような課題を抱えているのかを把握し、それらの解決方策を検討するため、アンケート調査の実施を支援した。その結果、「生産者同士の情報交換の中で技術を学びたい」、「増反したいが作業の効率化に機械が必要」、「周年化に取り組んでみたいので栽培支援が欲しい」、「セル苗定植は生育が良いが定植作業が大変。定植機を導入して増反したい」、「販売が何より大事。販売価格が良ければ、自然と生産意欲も湧く!!」などの意見が把握できた。

(3) 作型の拡大

現在、東部地域の白ネギについては、殆どが秋冬ネギであり、11～1月に出荷が集中している。1戸あたりの作付け面積を増加させるには、同じ秋冬ネギでも10

月出荷に取り組むことや、春ネギ、夏ネギ等の作型を導入するなど、作型を組み合わせることが長期出荷を図り安定的な販売を行う必要がある。そこで、10 月出荷作型については、講習会等で栽培管理の考え方について理解を得るとともに、栽培途中にも現地指導会や巡回指導を実施して管理について助言した。また、春ネギ、夏ネギについては一部の地域で取り組まれているが、更に多くの農家についても取り組みを促すため、作型の事例の調査と現地実証を行い、作型の紹介と今後の取り組み方策について助言した。

(4) 栽培・出荷調製作業の省力化及び効率化

当地域の1戸あたりの平均作付面積は15.1アールと小規模ではあるが、機械導入により省力化を図り規模拡大を志向する農家も多い。そこで、定植機、根葉切り機、皮剥き機等導入を希望する農家等について、機械導入と作付け規模の検討を支援するとともに県内導入事例の調査と機種選定等のための先進地視察研修等を支援した。

また、出荷調製作業は白ネギ生産の中で最も時間のかかる作業であり、規模拡大のためには効率化を図る必要がある。そこで作業実態を調査し、問題点の抽出と優良事例の収集を行い、改善策と併せて「出荷調製マニュアル」を作成した。それを元に、それぞれの農家の作業場を巡回し出荷調製作業の効率化について支援した。

(5) 新規栽培者の確保と栽培技術支援

主に各地域の生産農家、JA支店、関係機関等が中心となり新たな栽培者の確保を進めているのに加え、普及所は、新規栽培者について定期的に巡回し生育状況を確認しながら栽培管理方法について助言を行うなど重点的に支援した。

3. 具体的な成果

(1) 生産指導體制の強化支援

平成25年4月、白ネギ振興を強力に進めるため「JA鳥取いなば白ねぎ生産出荷協議会」の中に、各JA支店生産部の農家代表・支店営農指導員・JA営農指導センター・農業試験場・鳥取普及所・八頭普及所をメンバーに構成される「白ねぎ指導者協議会」を立ち上げた。協議会のメンバーで各地区現地巡回、情報交換、栽培暦作成を行うなど指導體制が強化された。



(写真) 地区毎の現地指導会の様子

(2) 栽培管理技術の徹底

夏越しの管理が課題となっているが、研修会、現地指導会、巡回等で追肥・土寄せ、排水対策、夏季高温期の管理等について繰り返し説明を行い理解を深めた結果、これらを意

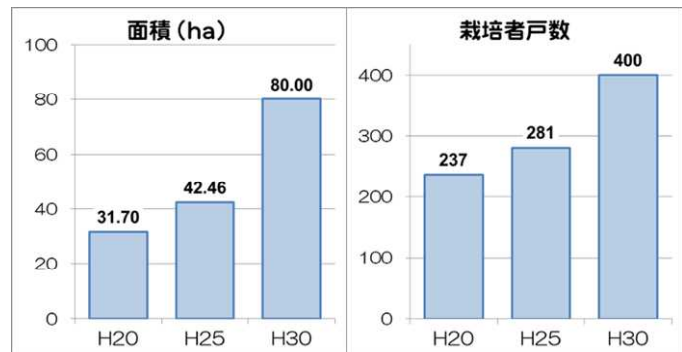
識して管理にあたる農家が増加し、秋の生育が順調に進み 10 月出荷が増加傾向にある。

(3) 出荷調製作業の効率化

農家の優良事例を取りまとめて、「出荷調製マニュアル」を作成・配布し、各農家の作業改善を図るとともに、特に新規栽培者に対しては作業場で調製状況について確認の上具体的な改善案を示すことができた。その結果、一箱当りにかかる時間が 30～40%減少し効率化を図ることができた。

(4) 生産者数の増加、面積の拡大

高齢化等によりリタイアする農家もあるものの、年々新規栽培者が加わるとともに個々の栽培面積も拡大しており、徐々にではあるが全体の面積が増加し、平成 25 年度には栽培面積 42.4ha、281 戸まで回復した（平成 17 年度 26.1ha、175 戸）。



(図)生産状況の推移 (H30 は計画)

地域全体で白ネギ振興への気運も高まり、平成 26 年度から「いなば白ネギ倍増プラン（頑張る地域プラン事業）」に取り組み、5 年後の平成 30 年度には作付面積 80ha を目指し、更に重点的に産地化を進めていくこととなった。

4. 農家等からの評価・コメント（鳥取市 A 氏）

白ネギ栽培に取り組んで 3 年目となるが、講習会や巡回指導により栽培技術について理解が深まった。収量については 1 年目の収量はかなり低かったが、3 年目には 10 アールあたり 800 ケースを達成することが出来た。年々面積を増加してきたが調製作業のスピードもアップし、次年度は更に増反したいと思う。また、夏ネギ、春ネギなどの新たな作型にも取り組み周年出荷を目指したい。

5. 現状・今後の展開等

「面積倍増」を掲げ、平成 26 年度から更なる産地振興に取り組むこととなった。そのためには、既存の農家一戸あたりの作付面積を増加させることや、退職後就農者や新規就農者等の新たな取り組み農家を確保する必要がある。また、秋冬作型に特化している現状であるが、夏ネギや春ネギについてより多くの農家に取り組んでもらい、面積拡大と長期出荷を実現し、より安定的な販売を行う必要がある。

(執筆者：宮田 修・難波 唱子)